会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

診療・診察ガイドラインはありがたい

函館市医師会
亀田花園病院
松本　佳隆（まつもと　よしたか）

大学医局人事の枠から飛び出し民間病院において一般医師として勤めるようになり、早、10数年が経過しようとしている。時折、専門医での知識を使いながら診断・治療をすることもあるが、それ以上に一般医師（一般内科）としての仕事が圧倒的に多い。現在のように研修医期＋専攻医期を経て専門医になるのと違って、いきなり専門分野に入局する形態が一般的であった大学卒後30年くらいの医師にとっては、個人的にローテーション研修でもしていなければ他科の領域については馴染みがなく経験しようにもその体制はない。

民間病院で一般医師として働く以上、他科（特に内科全般）の経験はほどんど無いが、とにかく知識だけでもなんとかしようということで、日本医師会雑誌の生涯教育シリーズを愛読している。その中でよく引用されているのが、それぞれの科の学会で発表されている診療・診察ガイドラインである。もちろん全ての疾患や治療が網羅されているわけではないし、ネットで一般公開されていない内容もあるが(学会員にならないと閲覧が不可のものもある…)、公表されているガイドラインに関しては、日常診療・治療の道標になっていると感じており実際に利用している。

20年くらい前に自治体病院で働いていた時、大先輩の医師に「ガイドラインは所詮ガイドラインに過ぎず、専門医たるもの自分の治療は自分の経験と実績に基づいて行うものだ」と言われ、それも一理あるかなと思ったものである。しかし、広範囲な診療を求められる一般内科医にとっては、全ての分野の専門医的な経験と実践を得るのは不可能であり、その治療が患者にとって有益性を保つためには、各科の診療ガイドラインが頼みの綱である。今後とも家庭医向けの診療・診察のガイドラインの作成とアップデートを期待している。

我が家にもインバウンド

苫小牧市医師会
あつまクリニック
呉　賢一（くれ　けんいち）

2023年５月に新型コロナウイルス感染症が５類感染症に移行したこともあり、最近のインバウンドの急激な増加は様々なところで実感するようになっている。都市部である札幌市内は勿論のこと、出張先で乗車する地方への特急列車においても、自由席では少し遅れて乗車してしまうと、ほぼ満席で座れないほど、英語・中国語・韓国語・タイ語・ベトナム語・インドネシア語など様々な言語が飛び交っている。

そんな中、昨年末に我が家にもインバウンドがやってきた。と言ってしまうと語弊があるが、私の母のいとこの娘（またいとこ）夫婦がはるばるニューヨークから来道した。ニューヨーク→シンガポール→沖縄→九州→北海道→台湾→ニューヨークという日程を約２週間で周遊する旅行の一環で、北海道には３泊４日滞在してくれた。またいとこの実家はニュージャージー州にあり、私が約20年前にアメリカ留学していた際の夏季休暇時に、日本に帰らず英語習得のため長期滞在させてもらい大変お世話になっていた。今回はそれ以来の再会で、事前に温泉と刺身とスキーが好きということを聞いていたので、それを元に道内滞在中の日程を組んだ。

私もまたいとこも台湾にルーツがあり、細い話になるが、それぞれ台湾系日本人、台湾系アメリカ人といえる。台湾人は基本的に日本のことが何でも好きで受けがよく、またいとこに関しては特段心配しておらず、夫が白人なので温泉や生魚に多少は抵抗ないだろうかという心配があったが、それも杞憂に終わった。男風呂に掃除する女性が普通に入ってくるのは気にしていた（確かにその感覚は正しい）が、刺身に関しては「akami」「chutoro」「otoro」とマグロの分類まで知っていた。

北海道へ来る前までに言葉で困らなかったか聞いたが、翻訳アプリを使いこなしてどうにかなったと聞いて、今は本当に便利になったなと改めて実感した。私が留学していた当時は、常に電子辞書を持ち歩いて、わからない単語に出くわす度に、打ち込んだり打ち込んでもらったりしていた頃が懐かしい思い出である。支払いに関しても、アメリカは20年前もカード社会であったが日本は当時そこまででない記憶があり、今でこそキャッシュレス化が進みインバウンドもスムーズに観光ができていそうである。パンデミックの数少ない良い側面が出たのではなかろうか。

最後に、Netflixを観ている話題になり、何が面白かったかと聞いたら日本の番組の“Old Enough”と言われ、絶妙な翻訳に感心した（笑）。